
スーラ

もこな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーラ

【Nコード】

N7068F

【作者名】

もこな

【あらすじ】

これは今よりずっと科学が発展し、そのおかげで作られた、K，S。危険生物が街中をうろうろしている。科学の発展と危険生物の存在。それらを除くと、現代と変わらない所。これは、そういう星、スーラに住む一人の少年の物語である。

〈NO1〉 壊れる日常（前書き）

初めて書いた小説ですのでへたくそかもしれないですが
けなしたりしないでくださいね（＾―＾；）

（NO1） 壊れる日常

「萱島 海斗」中学一年。彼はいつも明け方五時ぐらいに起きる。なぜかという、両親がほぼ毎日喧嘩をしているからだ。うるさくって眠れやしない。だが彼は両親の喧嘩についてはあまり気にしない。もう二人が喧嘩していることに慣れてしまったのだ。

けれど、その日は違った。何故か、朝の三時に起きた。しかも、いつもの喧嘩の声ではなく自分で起きてしまったのだ。それに汗びっしょりで、寒気がして嫌な予感がした。

（何だろう、この嫌な予感は・・・まあいいか。あんまり気にしすぎるのも駄目だよな。）

こんなことを思いながら、リビングに下りた、さっさと朝食を済まして、また自分の部屋に上がった。雑誌でも読んでおこうか。

「・・・やべっ寝ちまった！・・・まだ四時ぐらいかな・・・二人がまたやってるからな・・・しかもこれ喧嘩のはじめの方じゃん。」

二度寝してしまい起きてみると一階のリビングから、怒鳴り声が聞こえる。

（喧嘩するのはけっこうだし、別に俺も良いんだけど・・・近所迷惑じゃねえの？この早朝からはさあ・・・）

それから海斗は三度寝をしようとベッドに横になりまた寝た。

「ふああゝ あ、もう五時半じゃん」

着替えて、下にそ〜っとおりた。何故かと言うと両親は、どちらが正しいか、海斗に結論を迫ってくる。だが、「子供の言うことだから」といって余計ややこしいことになるだろう。

「いつてくるよ」

一応言っておいた。まあ両親は、聞いていないか、いや聞けないか口げんかに必死だ。

公園で、ひろった猫に餌をやったり、いろんな所に寄り道したりし

ているうちに学校に着いた。

「やっぱ門開いてないか。ってか空いてたら怖いし・・・。」

だが運動神経のそこそ良い海斗はそのまま門を乗り越えて、教室に入った。自分の席に座りひと眠りしようと思って机に足を乗つけた。

（先生がいたら怒られるだろうなあ）

「おい！萱島！お前何行儀悪いことをしてるんだ！！」

海斗はびっくりして椅子から落ちかけた。

「はっはいすみません・・・。って直樹かよーびっくりしたじゃんか。」

「ゴッメーン。なんか海斗見ると驚かしてやんなきゃなんないかなあって。」

早く学校に来ていた先生かと思ったが、海斗の親友の直樹だった。

直樹のお気楽な言い方に、海斗がきれた。

「何が驚かしてやんなきゃじゃー！！ふっざけんなあ！！」

普通の中学生と同じような平和でお気楽な時間が過ぎた。そう、どこの子供も送っているはずの時間が過ぎていった。

ザアアア

「げっ雨降ってんじゃんか。俺、傘もって来てねえし。運悪ッ！」

直樹がうなだれた。そして、海斗にお前はあ？ときく。

「んー俺は持ってきてるけどお前を入れてやるほど優しくない。」

雨を見て海斗が手早く靴を履き替えながら言った。

「なんだよー入れてくれても良いじゃんかあ・・・友達でしょ？ない・れ・て？」

くねんと気持ち悪い動きをしながら直樹が言った。

「お前といつ友達になったんだよ。ハゲ。それと早く行かないと公園の猫が濡れちゃうんだよ。」

海斗がそういうと直樹は海斗が思ったよりあっさり、じゃあ仕方ないな。と言って雨の中を走っていった。まるで小学生のようにじゃ

「なーと手をぶんぶんと振っていった。

直樹と別れた後海斗は途中のコンビニで、ビニール傘を買って猫のいるダンボールに、置いてから家に戻った。

「ただいま」

家に帰りたくないなんて思いつつも普通に海斗は家に帰ってきた。ただいまなんていっても誰からも返事はいつも返ってこないと思っていたが、今日は違った。

「おかえり」

母のいつもと違う言葉。それにいつもの母の愚痴もない。

「着替えて降りておいで。ズボンの袖びしょびしょよ？このまま風邪ひくわよ。それとお母さんとお父さんから話があるから、早く降りておいでよ。」

真剣な顔で言う母に少しびびりながら海斗はうん。とひと言言って二階へあがった。

いつもはない母のおかえりと言う言葉と自分を心配してくれる母の言葉に胸が温かくなった。普通の子供ならいつでも言われている言葉、でも海斗にはこんなことめったにないのだ。嬉しいが、疑問がのこった。

（何で父さんもいるんだろう……。昼間は会社のはずなのに。）

なんてことを考えながら二階へあがり、服を着替えて一階へおりた。（母さん真剣だったよなあ……。父さんの仕事の都合で転校とか？それは絶対やだ。）

うーん。と頭を悩ませながらリビングに入り母と父の前に座った。

「なんだよ、話って。」

海斗は父に聞いた。転校じゃありませんように！と心で願いながら。

「それがな……。えーと……。あの……」

父が頭を掻き、言いどよんだ。父が困った時に見せる癖だ。本人は気が付いていないが。

「もうっじれったいわね、あのね海斗、お父さんが会社くびになっ

たのよ・・・。」

母がゆっくりと、重々しく言った。

「え？ええ！！そ、それで？」

海斗はものすごく焦った。思った転校よりひどいかもしれない。

「お母さん達ほら、いつも喧嘩してるでしょ。それに会社くびになったし、これをきに」

母はゆっくり大きく息を吸った。そして、一言

「離婚しようと思うの。」

海斗は自分の耳を疑った。母のいい間違いではないか。それとも何かのドッキリなのか。

「りっ離婚？！嘘だろ冗談はよせて」

もう一度海斗は聞いた。両親が笑顔で「エイプリルフル！！」とでも言ってくれないかと思った。けれど答えは違った。

「そう離婚」

二人は海斗の希望通り否定などしてくれず、重々しく言った。

「それでね、海斗はどっちに着いていくか聞いておこうと思って。」

母が淡々と話を進めていく海斗には訳が分からない。

「はあ？」

海斗が聞き返した。まだ、両親たちが冗談を言ってると思ったかった。

（これか・・・朝の嫌な予感）

そう思いながら、絶対にそんなのありえないと考えていた。だって両親は喧嘩ばかりじゃなかった、仲がいい時もあったはずだ。そんなはずない。本当の事だと認めてるフリをしながら本当は嫌だった。心のどこかで否定していた。

「だからね・・・」

母がそう言いかけた時、何年もためていた海斗の怒りが爆発した。

「いいかげんにしろよ！二人で勝手に決めて！！家族会議とかしろよ！！それにあんた達もずっと喧嘩じゃなかったじゃないか！！ふざけんな！！！！」

何年も2人が喧嘩して寂しかった思い、怒り、悲しみが一気に爆発したようだった。平気なフリをしていてもやっぱり寂しかった。二人が喧嘩してるのは嫌だった。ちっとも二人の慣れてなんかいなかった。ただ、大丈夫なフリをしていただけ。

「海斗!!!」

二人が呼び止めるのも聞かず海斗は荒々しくドアを閉め、自分の部屋に帰り、一番大きい旅行バックに、いろんなものを詰めた。着替え、小さめの危険生物用の銃、通帳、財布など生活に必要なもの。こんな家出てってやる。海斗はそう思いながら泣きながら荷物を詰めた。階段を勢いよくかけ下げ、玄関から走って出て行った。雨に濡れながら海斗は思った。

（これから一人で生きていくんだ）と、悲しい気持ちで、海斗は雨が降る暗い道をとぼとぼ歩いていった。

（NO1完）

〈NO1〉 壊れる日常（後書き）

どうでしたか？良ければ感想をお願いします。

（NO2） ひとりぼっち

ザアアー・・・雨の中、海斗は一人、泣きながらとぼとぼ歩いていた。
ガオオオ！

（ああ、危険生物だ）と海斗は思った、食われてしまおうか。しかしそのとき一瞬、

（死にたくない！！）という事で頭がいっぱいになった。危険生物用の銃を取る暇もなかった。危険生物は、もうそこまで近づいている。

「うわあああ！いやだあああ！！死にたくない！！」

食われる！と思ったその瞬間、ぐしゃッ・・・ふっと海斗の前に影が現れた、瞬間、危険生物が消えた。いや倒されたというべきだろう。海斗の前には残骸が残っている。白髪に黄色の瞳の少年が海斗の前に立っていた。年は、見たところ、十三いや、十一ぐらいじゃないだろうか。腰に日本刀をつっている危険生物もそれで倒したのだろう、海斗に手をさし のべて言った。

「お兄ちゃん大丈夫？」

少年の服は、何かの制服だろうか？

（かわいらしい声だなあ。それに顔も整っている。子役にも十分なれそうだな。って何考えてんだ。俺！こんな危なかった時に！！）

「あ、ああ」

海斗は焦って返事をした。

「濡れてるよ、傘ぐらいさしたらいいのに・・・。家庭のごたごたで家出でもしてきたの？」

「うっ」

凶星を言われ海斗は言葉に詰まってしまった。

「あせるっという事は、凶星だねえ。」

ずばずばと痛いところをついてくる少年に海斗は感謝半面怯えてもいた。

（あんな一瞬で危険生物を倒すなんて只者じゃない）

しかし、ふと海斗は思った。ちよつと待てよこの子俺より年下じゃないか。

「家に帰った方がいいよでも、家出してきたのなら帰れないね。」
馬鹿にしたように言う（海斗にはそう聞こえる）少年に海斗はムカッとして、言い返した。

「何だよさっきから偉そうに、助けてくれたのは礼を言うけどさ、でもそんなに年下に偉そうにされると嫌なんだよ。」

ちよつと言い方がきつかったかなと海斗は少し心の中で後悔した。

「そうか・・・ごめんなさい・・・職場ではそんな感じで年上の人としゃべってるから。」

少年はしょぼんとして言った。海斗は少年をいじめたような雰囲気になってしまつて少し焦った。すると少年が急にそうだ！と言い海斗のほうにくると向くとにつこり笑った。まるで女の子のようなその笑顔が眩しい。

「家出で家に帰れないのだったらうちに来たらどうですか？」

急に敬語になった少年に少し驚きつつも海斗は言った。

「いや、いいよ。そんなの悪いし君んちの人に迷惑かけたくないし・・・。」

海斗はいくらなんでもこの子の家族に迷惑がかかるだろうと思ひ断つた。しかし、

「大丈夫ですって。いいから来てくださいよ。」

少年はニコニコ笑いながら海斗の手をとって引っ張った。あの天使の笑顔に逆らえなくて海斗はお邪魔して、てきとうに帰ろう。などと考えていた。

二三分歩いたところに小さなボロアパートがあった。少年は郵便受けを覗いた、郵便受けには結構な量の手紙が入っていた。それら全てを持つと、少年と海斗は階段を上っていった。

「どうぞー。」

少年に招き入れられ海斗は家に入った、冷蔵庫にテレビ、ラジオな

どなど。

海斗は（ここに何人住んでいるんだろう）と思った。海斗が見たところ1人暮らしのようである。そんなばかなと考えていると少年が海斗の方を振り向いていった。

「僕は、ライって言ってます。ここには僕一人で住んでる。あなたの名前は？」

内心ものすごくびくつきながら海斗は答えた。

「俺は、萱島 海斗。さっきはごめんな。敬語じゃなくていいよ。ライ君さっき職場とか言ってるけど仕事してんの？」

さっきのきつく言ったことを結構気にしていた海斗はライに謝った。それとさっきから気になっていた事を聞いた。

「どんな仕事をしているのかは明日分かるよ。」

ライは笑いながら言うと言紙を全てゴミ箱に捨てた。

その後ライに布団をしいてもらい。その日はライとならんで寝た。

次の朝・・・

「海斗おきなつてば朝だよおい。」

ライが海斗にのっかかりながら声をあげる。

「もうチョい寝かしてくれ・・・。」

いつもと違い起きるのが遅い海斗。なぜだか分からないがこの家は何故か安心して眠れるためいつもよりゆっくり寝れるのだ。

「うち・・・。いい加減起きろよ刀で刺すよ・・・。」

「へっ?!」

急に口調を変えたライにびくつきして海斗が布団から顔だけ出すとライが鞘から抜いた日本刀を海斗頭の真上に持ってきていた、顔がものすごく怖い・・・今にも刺されそうだ・・・。

「わあああ！分かった起きる!!起きるから刺すなあ!!」

海斗が頭を抱えていると。

「着替えて、僕の仕事見に行くんでしよう^^」口調を元に戻したライが言った

海斗は着替えてしばしばついて行くと、すごく大きい建物についた。
「ライさんおはようございます!」

大人がライにあいさつしていく、何かの制服を着ている、「特別幹部室」そう書いてある場所にライは入っていた。

「ラ・・ライ君? こんなところ入っていいのか?」

海斗は恐る恐る聞いた。

「大丈夫、僕、特別幹部だから・・」

海斗はわけが分からずついて行った。

「おはよう、杏奈さん。」

「おはようございます特別幹部長。」

海斗はありえないと思った、こんな11〜13才ぐらいの人が特別幹部長なんかになれるはずがない。

「ライ・・・ここは・・なんなの?」

びっくりしすぎてもうぼんやりしながら海斗が聞いた

「ここは危険生物から一般人を守る活動をしているとこだよ。あれ? 海斗知らなかったっけ?」

首をかしげながらライが言う。

「ちよつと着替えてくるね」

バタンツ別の部屋にライは入っていった

「ふ〜んあなたがライさんに助けてもらった男の子ね。」

「えっあっはいそうです・・・。」

急に話しかけられてびっくりしながら海斗は答えた。

「いいのよ、敬語なんて使わなくて。」

優しそうで美人な女性だ。明らかにライよりは年上だ。歳は・・女性なのであえてふせておこう。

「でも不思議ね〜ライさんは・・・」

杏奈がそう言いかけたその時、サイレンが鳴った。

「危険生物による火事まだ危険生物は暴れています。場所は・・・」
放送の声が続きを言った時、海斗は耳を疑った。そして何も考えられなくなった・・・。

「杏奈！早くしろ！出勤するぞ！」

何らかの制服にはじめてあった時の服に着替えたライが勢いよく入ってきたいつもの優しいライとはまるで違った。そしてライは海斗に言った

「海斗！もっと危険じゃない事件だったら連れて行くつもりだったけど今回は危険すぎる！だから……。」

ライがそう言いかけた時うなだれていた海斗が急に叫んだ。

「ライ！まってくれ！連れてってくれお願いだ！お前の仕事はどうとかじゃなくて個人的なことなんだ！」

海斗が言った時ライが鋭い声で言った。

「友達の家とかならゴメンだぞこれはものすごく危ない危険生物なんだ。」

「違う！そこは……俺ちなんだ！！！！」

そう叫んだ海斗にライは驚いたみたいで一瞬眼を見張った。すぐに冷静な隊長の顔に戻る。

「仕方がない……連れて行くけど、現場に着いたときは僕らの指示に従ってもらうからな。君がただけ言ってもだめだぞいいな。」

ライは、杏奈の車に乗り込んだ。父さん母さん生きていてくれ海斗はひたすらそれを願った。両親に最後に言った言葉が

「いいかげんにしろよ！二人で勝手に決めて！！家族会議とかしろよ！！それにあんた達もずっと喧嘩じゃなかったじゃないか！！ふざけんな！！！」だなんてそんなのは、絶対に嫌だ。

現場に着いた。

めらめらと燃える我が家を見て海斗は愕然とした。たった一つの思い出が詰まった家が燃え盛っていくのを見てふらふらと海斗は座り込む。

「海斗……この様子じゃもう……。」

ライの言葉に反論は出来なかった。両親がもうだめだと言う事ぐらいもう分かっていた。同時にもう自分が本当に一人ぼっちだと言う

۱۲۳۰

〔NO3〕 真実（前書き）

ここでは海斗たちの両親の秘密があかされます
W
W

（NO3） 真実

海斗の両親が死んでから一週間が経った。いくら毎日喧嘩をして、ひどい親だと思っではいてもやはり海斗は両親が好きだった。まだ両親が死んだショックから立ち直れない海斗は学校の屋上に一人屋上に置いてあるベンチで読書にふけている。いや、本当は読書にふけてなんかいない。今は頭の整理にいっぱいだ。ふいにカンカンと誰かが階段を上がる音が聞こえてきた

「ういーす海斗く。」

海斗の親友直樹が屋上に上がってきた、

「おす。直樹。」

何気なく海斗が答える、でもその声には感情がこもってない。まるで機械の音声だ。

「お前さぁいい加減にしろよ！！両親が死んで悲しいのは分かるけど、そうやってお前が生きながら死んでもお前の両親は帰ってこないんだぞ！！」

そんな姿の海斗を見て直樹がきれた。

海斗には、直樹の言葉は、正しいことぐらい分かっているでも……。

「うるせーよ！お前にこの気持ち分かるかよ！！俺は、俺はもう一人ぼっちなんだよ！！」

海斗はついそう叫んでしまった。

きっと直樹が自分にあきれて去ってしまうと思った。でも違った。

「そうだよ！！わかんねーよ！わかんねーから心配してんじやんか。お前の気持ち分かるってたらお前にわざわざ言わねーよ！だからしつかりしろよ、いつものお前に戻ってくれよ！！」

海斗は親友の最後の言葉に優しさがこもっているのに気付いた。

「うん……。ごめんな。」

海斗は言った。こういうのが精一杯だった。それ以上言うと泣いて

しまいそうだった。

「へへっいいよ俺もきつい事行ってゴメンな。それとお前は一人じゃないからな。俺がいるし。な！」

とりあえずは友情まで崩れずにすんだ。それに自分を心配してくれる人がいるたったそれだけの事が今の海斗は嬉しかった。

「ただいま」

今、海斗はライの家に住んでいる。当然のことだが……。

「おかえりいー海斗。なんかいつもより明るいね。どしたの？」

ライはほとんどのことを見抜いてくる。まあ特別幹部なので仕方がないか。

「えっいや学校でさ……。」

学校であつた出来事をライに話した。

「ふーん良かったね。ところで海斗、海斗の家の下からなんか箱が出てきたんだ」

ライはかばんの中をこそごと探った、大人でも持っていない人が多そうなどとても高そうな鞆だ。

中から出てきたのはビニール袋に包まれたとても大きな真っ白い箱だった

「指紋式で開くようになっていて僕らじゃあけないからさ、海斗の指紋であくかな」って思ってたさほら三つ穴が開いているでしょう二つが君の両親でこの1つが君かなって予想したんだけど、どう？」

海斗は恐る恐る三つ目の穴に指を入れた。ウィーンという機械音とともに箱が空いた、中には手紙らしきものと鉄の棒のような物ボタンがついている

あと何かの紋章が入った指輪。海斗はとりあえず手紙を読んでみた。手紙にはこう書いてあつた。

「海斗へ

私達の大切な子供へ

海斗、今あなたがこれを読んでいるということは私達両親もうこの

世に居ない時ですね

私達は結婚して仕事をやめました。きつとお父さんが何か仕事をしていると思っていたでしょうね。でもそれは嘘です。ごめんね海斗。本当は、仕事はあなたが生まれる前にやめていました。

やっていた仕事は・・・危険生物退治社長。ある意味一番強い人よ私達は仕事でとても大変なことを知ってしまったの危険生物達はただ単に暴れているんじゃないで計画的に動いているの。危険生物達は私達つまり人間を恨んでいるよ。危険生物を作り出した人間を・・・人間が自分たちを作り出されたおかげで仲間が痛い思いして殺されなくちゃいけないでしょう。だから危険生物は人間を全て皆殺しにしようとしているのです。その計画を知ってしまった私達も殺されてしまうということも分かりました。私たちはあなたのことを考えて、別れるかそれとも一緒に殺されるかというところで毎日喧嘩をしていました。あなたもそのせいで嫌な思いをしたでしょうね、ごめんね。

あなたは私達よりも特別な能力を持っています。あなたが家にいる限り危険生物は私たちに手出しできないのです。でも私達はあなたが手紙を読んでいる今は、何らかの理由でああなたが本当に家を出て行ったようですね。あなたは何も悪くないから気にしないで。私たちは、みんなを・・・人間を守るためにあなたに危険生物を倒してほしいのです。そのためにこの ビームソードとリングシールドをあなたに託します。」

読み終わったとき海斗は愕然とした。俺が家を出なかったら両親は今生きていたかもしれないのに・・・。

「・・・・・・・・海斗もしかして自分のせいで両親が死んだとか思っていないよね。」

やっぱりライは海斗の本音をついてきた。

「・・・・そうだけど今悔やんでもしょうがない。だから俺こんかいは両親の言いつけを守るよ」

手紙を握り締めて海斗が言った。眼には鋭い光が輝いていた。両親が死んだからと言って生きながら死んでいた海斗の面影はない。

「仕方がないなあ〜じゃあビームソードとリングシールドの使い方から戦い方まできっちり叩き込んであげるよ。」

ふふんとサディステイックな笑みを浮かべながら言うライ。悪寒が走りながらも海斗は元気よく言った。

「うしっやってやろうじゃないか!!」

〔NO4〕 ライの秘密（前書き）

K・Sとは危険生物の略です。

次から良く使います＞〔〕＜

（NO4） ライの秘密

キーン金属音のような不思議な音があたりに広がる、広い体育館のような場所だった。

「全然だめ！！こんな遅い動きだったら一番弱いK・Sを相手にしても死ぬよ！！」

厳しい、ライの声が部屋に響いた。

「でもさあライ俺昨日から何にも食ってないんだぜ空腹で全力は出せないけど」

海斗が言った。やる気ゼロの声である。

「あれ？そうだったけ・・・そうだ！！今、海斗は夏休みで学校ないから給食なかったんだっけ忘れてたよ色々忙しいからさー。」

ライは気楽そうにまた、楽しそうに言った。

「人の生命の危機だったのにそんなに気楽そうに言うなあ」

海斗は大声で叫んだ。

「ゴメンってば海斗今から朝飯作るから」

ライは反省の色も見せずに気楽そうに言った。

「まったく・・・。しっかりしてくれよ、ライこのままじゃK，Sを相手にする前に疲労と空腹で死んじゃうよ！！」

ライのアパートの中で海斗が遅い朝ごはんを食べながらライに文句を言っていた

「だ〜か〜ら〜ゴメンってば僕も忙しいんだよ海斗の両親が残した手紙に書いてあったK，Sが計画的に動いてるって事を調べているんだよ。だからだいぶ前から寝てな・・・。」

そうライが言いかけたときふらりとライの体が揺れ、倒れた。料理を盛った皿が落ちて割れた。

「ライ？ライ！！しっかりしろライ！！！！」

海斗はそれからすぐ救急車を呼び、ライは病院へ運ばれた。

「あのっライは、ライはどうなんですか？」

心配そうに海斗が医者に聞くと医者は、笑顔で答えた。

「だいじょうぶですよ、だだの疲労です。しかし・・・、あんな子供が疲労とは何をしていたんでしょうね・・・。」

医者はそれ以上追及しなかったが少しおかしいと思っているようだ。その時だった。

「海斗君！！ライさんは？どうだったの??」

杏奈だった。他にもぞろぞろと何かの制服を着た人がいた。

「隊長は無事なんですか??」

心配そうにその制服を着た男達が口々に聞く、海斗ははっきりと答えた。

「ただの疲労ですって。」

そう答えると周りにいた全員がホーッと息を吐いた。そのうち誰かが言った。

「だから無理しちゃいけないって言ったのに・・・ライさん昨日も一昨日も寝てもいないし食事もほとんど取ってないんですよ。」
うんうんとそこにいるほぼ全員がうなづく。

「じゃっライさんも大丈夫だと分かったしはいっ全員仕事に戻るよ！！」

杏奈が鋭い口調で言った。

「あゝもう副長は、厳しいんですから・・・」

誰かが言って、そしてどっと笑いが起こった。

「じゃっ海斗君ライさんお願いね。多分すぐ病院抜け出そうとするから」

杏奈はそう言って去っていった。海斗は意味が分からなかった。ライが病院を抜け出そうとするのはどういうことだろうか。

「ぎゃあゝ！！」

海斗がそんな素朴な疑問を考えていると誰かの絶叫が聞こえた。海斗は急いでライの病室に戻っていった。もしかするとライかもしれないと思って、するとさわいでいたのは海斗の予想の中でライだっ

た。点滴を打たれそうになって病室を逃げ回っている。幸い移された部屋が一人部屋だったためあまり他の人への迷惑はかからなかった。

「あっ海斗！助かったもう帰ろう？僕元気だから。ね？」

ライがこんなに取り乱すなんてめったにない。それにからかうにはちょうどいい機会なので海斗はからかってみる事にした。

「えー？何でだよまた倒れられたら困るのは俺なんだぜ。あつもしかしてライ注射が怖いとか？」

面白半分で言うライは珍しくあせりながら言った。

「ち・・違うけどでも安全性てきには僕はどうかと思うね。ひ・・人の体内に針をさすなんて、へ・・下手したら大変なことになるし、痛いし。」

ライの最後の一言はとても小さかった。海斗はくすくす笑って言った。

「分かった、分かったから。よし、帰ろうか。」

海斗は医者にはライはもう大丈夫だからと言ってうちへ帰った。うちといってもライのうちだが、いつもの通りライは郵便受けを見るとライの目の色が変わった。

「ライ？どうしたんだ？」

海斗が心配そうに聞くとライがふつと言葉を漏らした。

「まさか・・・そんなバカな・・・」

かなり動揺しているようだ。あまり本心を見せないライなので海斗はすごく驚いた。

「ちょっと海斗ごめん、上に言ってから話す。」

ライは足早に階段を上がる、海斗は急いで追いかける。部屋に入るなりライが言った。

「海斗。上官から海斗と共に旅をしなくちゃいけない。と手紙が届いてる。」

静かに言った。いつものお気楽な感じの雰囲気は一切無い。あの悪夢の日以来だ。

「えっ？どっどこに？」

海斗が不思議そうに聞いた。

「K・Sの聖地・・・スーラの裏側だ。」

海斗は頭が混乱してきて倒れそうになった。ライといるとわけが分からないことばかりだ。

「スーラの裏側！？そんなものがあるのか！？」

するとライはさらりといった。

「ああ・・・国内機密にしている海斗言ったら抹殺されるからいなよ。」

海斗の悲鳴が上がったがライは無視した。そしてつぶやいた。

「おかしい・・・。海斗が社長達の息子だということは僕しか知らないはずなのに・・・。」海斗はおびえから立ち直り言った。

「で？いつ行ってどんな仲間と行くんだ？？」

ライは驚いていった。

「は？海斗！！行く気なの？？これは罠かもしれないんだよ！？」

ライが驚いて言った。

「もちろん！！」

ライの言葉に海斗は当たり前のように言った。

「海斗せいぜい死ぬなよ。海斗。君弱いからね・・・。」

嫌みったらしいライの言い方に海斗も嫌味まじりに言う。

「お前こそ死ぬなよライ？まっおれの方が生き残れるけどね」

ライは、ははっと笑い言った。

「んじゃ、戦術をもっと磨かなきゃね。」

（NO5） 別の世界へ

午前3時、外は真っ暗だ。しかし、あるアパートの一室だけに明かりがともっている。

「起きろよっ今日は4時に○×空港に行かなきゃなんないんだろ？ おいっ起きろっば！！」

アパートその一室の中では海斗がひたすら自分の横にある布団を揺さぶっている。中にいるのはライのようだ。

「うるさいよ……」

殺気のこもった声が布団の中から聞こえ、海斗はビクツとしていったん揺さぶるのをやめた、そのあとまたスースーと寝息を立てて声の主のライは寝てしまった。海斗はさっきの恐怖を振り払うように首をふり深呼吸すると覚悟を決めたのだろうか、寝息を立て寝ている者の掛け布団を思いっきり剥がした。

「わっ海斗！！何すんだよっ寒いじゃないかばかやろうっ」

さっきの恐ろしい殺気のこもった声とは違う、普通のライの声が聞こえた。

「ばかやろうはお前だっ「明日は朝4時に○×空港に行かなきゃならないから早く起きてね海斗」って言ったのは誰だよ！！」たくライが起きないから起こそうとしてみればあ？殺気込めて反抗してくるしい？」

海斗はすねたように言った。

「あゝもうっ海斗悪かったってば今日は疲れてちゃんと起きるの忘れてたんだよ。」

ライも眠たそうにあくびをしながら言った。

「海斗？準備はできてる？それに時間帯はS・Kもいっぱい出てくるからね？」

ライは少し真剣な顔つきで言った。

「ああ。いつここに戻れないかわかんないんだろ？もしかしたら一

生戻れないかもしれないし。とりあえずシャツ、ズボン、下着、携帯食料、水筒とかの旅に必要なものはちゃんとかばんに入れたよ。あっそうだ。杏奈さんが連れてくるって言ってた旅の仲間は何？」

海斗は不思議そうにいった。

「その人とは空港でおちあう約束なんだ、あっ海斗もちろんビームソードとリングシールドは持ってるよね？」

もちろんだよと言う海斗の言葉にライは満足そうに笑みを浮かべた「よしっじゃあ出発だ。」

「ちよっライ？スピード出しすぎ！！って言うかライ11ぐらいだろ？いつ免許取ったんだよ！？」

朝早い高速道路の高級車の中で海斗が悲鳴をあげる。

「え？免許？そんなものもってないけど？あつても安心してよ海斗、杏奈によく教えてもらったからさっ」

200キロを軽く出して車をとばしているライに海斗は叫んだ。

「免許持っていないって！！ライ！！俺もう降りる！！こんなスピードの無免許運転にのってたら命がいくつあっても足らなわ！！ライそんな、無免許でこんなスピード出してつかまるだろ！？任務やる前に捕まる気かよ！？」

絶叫しまくる海斗にライはクスクス笑い気楽そうに言った。

「そんな僕が捕まるなんてありえないこと言わないでよ海斗僕が捕まるはずないだろ？」犯罪者じみたことを言いながらライは車のスピードを上げた。そして海斗の悲鳴の声が大きくなった。

「海斗うるさいよ。高速道路周りの住宅の方々に迷惑だろ？まったくこんなところでキャーキャー言うなんて海斗も子供だなあ」

海斗はこのめちゃくちゃな運転に酔ったのだろうかぼそりと年下のライに言われたくないよ。とつぶやいた。そしてまた車はスピードを上げた。

「おえっ気持ち悪い・・・ライこんどはちゃんと教習所行ってよね。」

」
空港のフロントで海斗がうめくように言った。

「何でさ海斗？僕の運転は完璧だし、事故を起こしたことも一度もないし、ましてや捕まるなんてありえないでしょ？あつ杏奈さんおはよう。」

ライが海斗の後ろにいる杏奈に声をかけた。

「おはようございますライさん。」

杏奈もはにかみながら挨拶を交わす。

「えっ杏奈さんいつからそこにいたの！？ぜんっぜん気付かなかつた！！」

海斗がビックリして言う杏奈はチツチツと指を振った。

「だめよ海斗くんこんな簡単にけはいを消すぐらいで気付かないなんて私が敵だったら海斗くんはその辺に死体で転がってるところよ？」

杏奈が海斗に忠告をした。その言葉に海斗は少しむっとした。

「そんなこと言ってたって俺はライから訓練を受けてまだ2週間しかたつてないんだよ！？そんなにすぐけはいまで気付けるはずがないじゃんか！！」

海斗が怒って少し声を荒げて言う杏奈はクスクスと笑いながら冗談よ。と言った。

「ふーんなんだたいしたことないなあ少し期待したのに。」

ここにいる誰でもないが聞こえた。まるで人をからかうような口調だった。

「誰だっ！！」

海斗がいつでも攻撃態勢に入れるように構えた。ライが大丈夫だよと声をかける。

「なあーんだライさんはすでにお見通しってわけか。」

空港の隅から海斗と同じぐらいの背丈の人影が出てきた。

「こらっリオンっちゃんと挨拶しなさいっ全くなんでこんなに口が悪いんだか・・・」

今度は最初の声と似ているが別の声だ。

「でもさあ、シオン？こいつ俺らより弱いんだからさ敬語とかちゃんと挨拶するとか気に入らないんだけど？あ、ライさんはじめまして。」

リオンと呼ばれた金色の髪に銀色がかった瞳そして整った顔立ちの少年が言った。

「だからってそんなため口でしゃべっていい事なんてないでしょ！」

逆にシオンと呼ばれたさっきの少年とそっくりの銀色の髪に金色がかった瞳の少年が言った。

「あつ弟のリオンが失礼しました。はじめましてライさん、杏奈さん、海斗さん。リオンの兄シオンといいます。これから長いことよろしく願います。」

シオンがぺこりと頭を下げた。

「いえいえこちらこそこれから長いことよろしく願います。別に敬語じゃなくていいですよ？年齢的にはあなたの方が年上ですから^^」

ライははにかみながら言った。

「わーい」「じゃあタメ口で。」

リオンとシオンが少し歓声を上げた。

「えっと・・・別に敬語じゃなくてもいいけど弱いとか言われんのは気に入らないな俺はさっき言ったように最近戦闘の訓練を始めたばかりだからお前よりも弱いのは仕方がないけどすぐお前なんかより強くなってやる。」

海斗が少し嫌味をまじえて言った。よこでライがやめときなよと海斗をなだめている。

「・・・あははっいるよねえそういう勘違いしてる奴がさあ、萱島さんたちが俺らよりばくぜんと強かったのは認めるけどさあ萱島さんたちの息子だからなに？たかがそれだけで強いなんて思う？あはっ思い込み激しいなあそれともなに？今すぐ俺に勝てますか？海

斗サン？」

リオンが海斗をバカにするように言った。ブチッ海斗がキレた。

「っこのクソガキっ人が氣を使つてやってんのにぺらぺらとうっとしいこと言いやがってお前なんか俺が本氣になれば一瞬でも殺せるんだぞっ」

ライが海斗に怒る前にリオンが動きながら言った。

「へえその前に自分が殺されないように氣をつけなよ。あははっ」

真っ黒の剣が光り海斗に襲いかかった。ライが海斗の守りに入ろうとしたが、真っ黒の剣のほうが早かった。

「ここでもう旅は終わっちゃうのかよっ俺・・・父さんたちの言いつけ守んなきゃなんないのに」

海斗は思った。その時、

「リオンっいい加減にしろっ」

鋭い声が聞こえた。海斗と海斗を守ろうとしたライの手前で真っ黒の剣が止まった。

「っ悪かったよシオン。悪かったから・・・ごめん興奮したんだ・・・」

するりとリオンがシオンの元に戻っていくそのままシオンの後ろへ隠れた。

「本当にすみません・・・少し頭に血がのぼってしまったようなんです・・・本当に申し訳ございません」

シオンが海斗とライにぺこりと頭を下げた。するとライが少し殺氣をまじえた声で言った。

「そんな血が頭に上っただけ仲間になる者をきりそうになる奴なんか信用できないな。杏奈本当にこいつらが信用できるのか？」

杏奈が答える前にシオンがはっきりと言った。

「そんなっ手を出した僕らも悪かったですけど海斗さんが挑発したのも悪いじゃないですか!!・・・。。。。それに僕らはこの状況をほっとくわけにはいかない。帰れと言われてもあなた達を脅してついていく。」

最後の声は先ほどのライの殺気が比べ物にならないぐらいの恐ろしさだった。

「・・・確かに挑発した俺も悪かった。ごめん。ライもそんな風に言うなよ俺が殺すなんていったからだ。シオンくん？ リオンくんにも謝つといてくれるか？」

海斗がそういうとシオンは顔を上げて

「・・・はいこちらこそ悪かったです・・・あの、海斗さん許してくれるんですか？」そう海斗に問いかけた。

「もちろんさっそれに海斗さんじゃなくて海斗でいいよもちろんリオン君もね？」

海斗がそういうとシオンも笑顔で答えた。

「じゃあ僕もシオンと呼んで下さい」
するとリオンも

「・・・リオンでいい」

と、ぼそりとつぶやいた

「そっか・・・じゃあ出発しようぜっこれからが楽しみだなライツ杏奈さんっそれにシオン！ リオン！」

仲間もおもしろい奴だし、これからが楽しみだ。と海斗は、いや海斗と仲間たちをのせた飛行機はK、Sの聖地、スーラの裏側へと飛び立っていった。

〔NO6〕 新たな仲間（前書き）

今回はすこしグロテスクな表現が使われているかもしれませんが。苦
手な方は回れ右で。

（NO6） 新たな仲間

「おいっ起きろよっ……っ海斗ってば起きろっつってんだよバカがっお前以外みんなおきてるぞっなあっおいってば」

早朝4時大きなテントの中でリオンが一つの寝袋をゆすっているほかの寝袋は全て空だ。寝袋の中は海斗のようでリオンがいくら努力をして起こそうとしているのをなにも知らないように幸せそうにスースーと寝息を立てて寝ている。するとリオンは何か思い出したように自分のかばんの中をゴソゴソとさぐり黒い四角い物を取り出してアンテナを伸ばした。

「あーあーこちらリオン・ライ。聞こえていたら応答せよ。」
なにやら四角い物はトランシーバーのようだ。するとザッザザーと言う雑音が入った後ライの声が返ってきた。

「あーあーこちらライです。聞こえてますけど、どうかしたのリオン？ 応答願います。」

ライはリオンへ問いかけた。するととたんにリオンは不機嫌になった。

「海斗がどんなに揺さぶっても起きないんだよ！！ていうかさあライたち朝食とってくるって行って出かけていったつきり帰ってこないしどこで道草くってんのさ！？」

リオンは怒った声で言った。

「いやあごめんって海斗は彼のかばんの一番小さなポケットに入ってる目覚まし時計鳴らしたらすぐ起きるよ？ なーんか最近安心したように爆睡しちゃうんだよねえー海斗はさあー」

ライはのんびりとした声でいった。するとトランシーバから別の声が聞こえてきた。

「ちよっとライ！ここどこ？！」

シオンの声だ。シオンの声にリオンは過激に反応した。

「シオンッ！！今どこにいるんだ！？ここどこってもしかして迷っ

たの？ライちょっとシオンにかわって！！」

ライが仕方ないなあと言いつランシーバーの向こうはシオンに変わった。

「リオン！？どうしよう・・・すごく大きい獲物を追っていたら迷っちゃってさ・・・どうよう・・・。」

シオンはトランシーバーから今にも泣き出しそうな声で言った。するとリオンはシオンにライにかわって。と言言いい、ライにかわるトランシーバーに向かって声を張り上げて叫んだ。

「どこで道草くってんのかと思ったたら迷ってたのかよ！！ちょっとライ、杏奈さんしっかりしてよ！！シオンに何かあったらどうするつもりさ！！このまま回線はつないだままにしとくか　ら何かあったら連絡してよね！！」

そう言つてリオンは自分のウエストポーチにトランシーバーを引っ掛けると、ライの真っ黒の大きいバックの前ポケットから古ぼけた黄色の目覚まし時計を手にした。そして今の時間に目覚ましをあわせそして目覚ましの音量を最大にするとスイッチをオンにした。するとリリリリリリリリリリイイイイイイイイとすごい音がテントの中に鳴り響いた。するとさっきまでぴくりともしなかった寝袋の中の海斗はガバツと勢いよく起きた。

「っ今何時だよ！！やべっがっこ遅れる・・・。あれ？」

ピツとリオンはしらっとした顔で目覚ましを止めるとキツと海斗をにらむと言った。

「てめーが起きないからわざわざライにもトランシーバーでどうやったらこのバカが起きるか連絡して訊いて、しかもライたちは朝食を取りに行ってくるって言ってからなんか道に迷って帰ってこないし、全部お前がさっさと起きないせいだ！！」

朝からずつと海斗を起こすために揺さぶっていたりしてよっぽど海斗に恨みがたまっていたのだろう。まるで弾丸のように言った。

「ごっごめんってば・・・あのさりオン・・・質問なんだけど、俺らはこれからどうしたらいい？」

海斗は謝りつつリオンに聞いた。

「さあ？そんなの僕が知るはずないじゃんか。」

そんな海斗の質問にリオンはさりと当たり前のように言った。

ところでそのライたちは戦闘の真最中。地上のKSとは比べ物にならないぐらい強い。しかも合計30〜50体ほどの数だ。大きさは大きいもので7、8メートルだろうか勝ち目はほとんどない。

「ライさん！！後ろ！！！！危ない！！！！」

杏奈が叫んでライの後ろに回り剣をかまえる。が、少し遅かったKSの尻尾が杏奈に襲い掛かり杏奈が倒れた。重症のようで生きているのかも分からない。

「杏奈！！！！しっかりしろ！！あ・・・」

ガッ！！！！杏奈に駆け寄ろうとしたライにもKSからの攻撃が襲い掛かる。超人的な反射神経でライは直撃を間逃れたが小柄なライはふっ飛ばされ大木にぶつかった。

「ライ！！大丈夫？！ライ！！！！」

シオンはひたすらライの名前を呼んだ。

「ボクは大丈夫だ・・・杏奈も息がある・・・ッ」

ライはいつの間にか杏奈の横に移りシオンに言った。しかし、さっきぶつかったところが痛むのだろうか息も切れ切れだ。シオンが目の前にいるKSを斬りライと杏奈に駆け寄った。ドンッ！！！！80,90メートルほどのKSが3人の目の前に現れた。

「ッ・・・逃げろシオン！！」

ライたちが後ろを振り返ると後ろにも同じぐらいの大きさのKSがいた。まるでティラノサウルスのようなKSばかりだ。しかし、すべて両手が鎌のような奴だったり、鋭い角が付いていたりする。人間なんてひとたまりもないだろう。4方全てを囲まれた勝ち目はゼロ、もうだめだ。そう思ったとき、

斬ッ！！！！目の前にいた4匹の巨大KS全てが真っ二つになった。そのすぐ後3人の目の前にまるで夜を体現するような青年が現れた。

真っ黒の服を着て真っ黒のブーツを履き真っ黒の帽子をかぶった真っ黒の。しかし肌は雪のように白く目の色は緋色、まるで血のような。髪は美しい銀色で長く後ろで一つにまとめていた。顔立ちは、まるで神が特別に与えたような美しさだった。剣も美しく、東洋系の全てが真っ白な剣、今は血で少し赤くなっていた。

「君たち何してるの？もしかして君達が上から来た僕の仲間？」

青年は3人の方を向き少し低い透き通った声で言った。シオンがうなずくと青年は今度は返事をせず、シュツとその場から消えた。そう見えただけなのであろうか。あのリオンの速度など比べ物にならないぐらい速い。次々とKSが倒れていく。返り血が青年の真っ黒の服を汚していった、よくみると青年は笑っているのだ。微笑だがそれも時間がたつにつれクスクス笑いになり、最後には声を上げて笑っていた。シオンは恐ろしい殺気を感じた自分へのものではないのはなんとなく分かったがそれでも背筋が凍りそうだった。それから10分ほどたっただろうか50体ほどいたKSは全て倒され、そこには息絶えたのに何度も切りつけられたどろどろの残骸だけがあった。

ペツと青年は血を吐き出すと冷たい眼でライたちを見てあきれ声で言った。

「バカじゃないの？たいして強くもないくせにこんなところ来て。集団自殺じゃあるまいし。」

シオンはぺこぺこ頭を下げて恐る恐る聞いた。

「本当にありがとうございます。僕たち道に迷ってしまっ……
・。あの、お名前は？」「シュン」

そう一言言うとシュンは杏奈とライを担いでスタスタと歩いていってしまった。

「ちょっと待ってくださいどこに行くんですか？」

シオンが焦ってきくとシュンはくるりとシオンを振り返った。

「君たち仲間のところに帰るんじゃないかったのかい？」

シュンの問いにシオンがコクンとうなずいた。それから少し間を空

け、首を傾げた。

「でもシュンさん僕らのテントの場所分かるんですか？」
するとシュンは心外だねと呟いた。

「僕は君たちがくる2ヶ月ぐらい前からココに来ていたんだから、
君たちがきてテントを張った場所ぐらい分かるよ。ほら、おいて行
くよ。歩きながらでも話はできるからね。」

シュンは一度止まってシオンを待つとまた歩いていった。海斗とリ
オンのいるテントへ。

）
N

O6） 完

〔NO6〕 新たな仲間（後書き）

新しいお仲間シユン君登場ですWWW
どうでしたか？感想などを送ってくれたらものすごい嬉しいです。

〔NO7〕 弱肉強食

〔NO7〕 弱肉強食

「なーなー海斗おーシオンたちかえって来ないよお・・・トランシーバーの通信も急にプツンって切れちゃったし・・・。やっぱ迎えに行ったほうが良いよおなー海斗ー聞いてんのかよーあんま俺のこと無視してっと向こうの川に突き落とすぞーなあ海斗ってばッ」スーラの裏側。一般市民には知られていない場所でリオンが抗議の声を上げた。すると海斗が振り向いた少し怒っているようだ。

「いい加減にしろよ。俺達が下手に動いて迷ったらライたちがテントに戻っても分け分かんなくなるだろ？それにいつひょっこり戻ってくるか分かんないだろリオン。俺らはライたちが帰ってくる時までテントを守っておくこと。」

リオンはだって・・・と言いかけて海斗ににらまれたのでぶつぶつと言うだけだった。

ガサツ海斗の目の前の草むらが揺れたバツとリオンと海斗が剣を身構えた。しかし草むらから出てきたのはK・Sではなく人だったのである。まるで夜をまとったような青年、シュンだった。しかしさつきと変わって黒くて長い髪で瞳の色はきれいなロイヤルブルーだった。彼の肩には杏奈が担がれていた。杏奈はぐったりしていて動く気配はほとんどない。その横にはシオン。ライを背負っていた。ライも同じくとてもぐったりしていた。二人ともどこか怪我をしているようだ。ライたちを見た瞬間海斗とリオンの表情が真っ青になった。

「ライ！！杏奈さん！！」「シオン！！」

海斗とリオンが同時に叫んだ。シオンはぼろぼろと涙を流しながらリオンと海斗に駆け寄った。

「リオン・・・海斗。早くライと杏奈さんの手当てをひどい怪我な

んだ。」

海斗は青年から杏奈を預かり、リオンは救急箱を出し、テキパキとライと杏奈の手当てをした。

「これでよしと。これならあと2〜3日寝てるだけで治るよ。応急処置が良かったみたいだ。シオンがやったの？」

リオンが聞くとシオンは首を振った。

「ちがうよシюнさんがやってくれたんだ。」

海斗がシюнに礼を言った。するとシюнは黙ったまま海斗たちを見た。

「失望したよ……。君たちはもう少し強いと思っていた。まさかここまで弱いとはね。」ため息混じりにそんなことを言いつつシюнは立ち上がった。海斗たちがどこに行くのかと聞きくと。

「こんなに弱いと足手まといになるからね。まあ時間はいくらでもあるし僕の住んでるころに来てもらうよ。ここはそんなに安全でもないからね。」

ピピッと腕に付いている機械をいじりながらシюнは言った。

「その二人は手で運べないからね。もうすぐ迎えが来る」

迎えなんかこのジャングルで来るはずがないじゃないかと海斗は思った。するとガガガガという音とともに車のような乗り物が空から降りてきた。海斗は絶句した。平凡な育ちの彼はそんな高級な乗り物を見たことが無かったのだから。

シюнはライたちを乗り物に乗せ、てきぱきと海斗たちの荷物をしまうと、それを乗り物の後ろのところに入れ運転席に乗り込んだ。

「行き先ハドチラへ？」

乗り物がいくつかの候補を挙げているとシюнは、

「自宅」

と一言だけ言った。

「カシコマリマシタ。」

ガガガガッいくつかの木をレーザーで倒しながら乗り物は空へ飛び立った。

NO. 7 完

（NO8）不思議な塔

（NO8）不思議な塔

不思議な宙に浮かぶ乗り物がスーラの裏側。一般市民に知られていない場所で飛んでいた。のっているのは海斗たち。そのうちのライと杏奈は乗り物の中で眠っていた。まだ怪我から回復していないらしくぐったりしている。そして、リオンは高いところが苦手らしく、下を向いていた。

「あのう……。シュンさん？ 髪の毛とか目とかどうして色が変わったんですか？？」

シオンがボーっと運転席に座っているシュンに問いかけた。するとシュンは少し顔をしかめた。

「僕はね血を見ると髪と目の色が変わる体質みたいなんだ。それが何か？ シオン。」

シュンがそうシオンに答えた。すると今度は海斗が言った。

「なあシュン。いつになったら着くんだよ。もう一時間はたってるぜ？？」

するとシュンが少しむっとしたような声で言った。

「君は一時間も待てないのかい？ それにもう少しでつくから黙っておいてよ。えーっと君は誰だっけ……。」

そう言いシュンが頭を抑えると海斗が怒った。

「俺は海斗だっ！ 仲間の名前ぐらい覚えろよ！！！」

海斗をシュンは無視した。無視されたことに怒ったのか海斗が座席でギャーギャー喚いていたが、シュンはやはり無視した。

「リオン……。大丈夫？ もうすこしでつくって。だからもうちょっとがんばって。ね？」

シオンはリオンの背中をさすりながら言った。この二人で違うのは髪の色と瞳の色だけだ。しかも、色は全く逆の色。シオンの呼びか

けに苦しそうにリオンはこくんとうなずいた。

それから30分ぐらい経っただろうか。真っ白の大きな塔が見えてきた。

「なあ！ シュンあれか！？ あれか！？ あんなすごい家に住んでるのかお前！！」

興奮した海斗が聞いてきた。またもやシュンは無視。ガガガガッ塔の壁の一部が開き乗り物の中に入れた。

「早く降りてよ。」

シュンが海斗たちを蹴り出そうと足を伸ばした。

「へいへい。分かりましたよーだ。あ、そうだライたちまだ起きてないんだけど・・・あれ！」

海斗はシュンの蹴りをよけて建物に降り、ライと杏奈が寝ているところを見て固まった。なぜなら二人がいないからだ。

「ちよっシュン！ お前ライたち振り落としたとかないよな！！」

慌てた海斗がシュンに訊くとあきれ声が返ってきた。

「僕が病人をそのままほうっておくと思う？ ココ着いてすぐ医療室に運んだよ。」

すぐって今さっきついたとこじゃんと海斗がつぶやいた。すると、ココにいる誰でもない声が聞こえた。だんだんこちらに近づいてくる。どうやら子供の声だ。ライかもしれないと海斗は耳を清ました。が、違った。

「・・・ンさん。お帰りなさい。」

可愛らしい10歳から11歳の少年だった。金髪で青色の目をしてる。海斗たち3人はシュンを振り返った。

「「誰！！！！」」

3人の声がびったりそろった。その声にシュンと少年がびっくりして後ろに仰け反った。

「ちよっと静かにしてくれない？ ここは僕の家なんだ。色々あって疲れたでしょ？ 部屋ぐらい空いてるから勝手に使って。あ、そのまえにココにいる人を紹介しておくよ。」

この子と、とシュンがさっきの少年の頭に手を置いて言いかけたときギャハハハッと言う笑い声がした。どうやら上から聞こえてくるようだ。海斗たちが上を向くと逆さまにシュンと同じ年ぐらいの青年が天井のパイプからぶら下がっていた。

「しゅ・シュンが「ちよつと静かにしてくれない？ ココは僕の家なんだ。」だってよ。ギャハハハハ！ ありえへん！！ あーもーヤバイな！！ お前なんでひよ、標準語でそんな風にしゃべっとなねん。」

青年は引き笑いをしながらそこまで喋ると逆さまのまま爆笑しまくった。イマイチ状況を読めない海斗たちにため息を吐きながらシュンが言った。

「まず、この子はスペード。ハンマー使いだよ。あんまり意思表示をしないから気を使ってやってね。あと、そこで爆笑してるバカがギルド。これでココにいる人は全部だよ。」

そうシュンが言い終わった瞬間ギルドが爆笑して天井から降りてきた。いや、どちらかと言うと落ちてきたと言った方が正しいだろう。「はっわろた、わろた。もうシュンお前ありえへんし！ 何で標準語でしゃべっとなねん。っていうかなんでそんな風に喋れんねん俺やったら齒かゆなるわ！！」

ギルドが続きを言おうとした時シュンが低い声で、一言。

「黙れ。」

と言った。が、ギルドは華麗に無視した。

「まったくほんつま最近の若いもんはあかなあ。みんな関西弁から離れていきよんねん

って俺も若いもんかつ。」

あはは。と笑いながらギルドが言うについにシュンがキレた。

「黙れって言っとなのが分からんのかこのアホが！！！！ いっぺん頭叩き割ったるかボケエエ！」

ガッシャーン。ギルドはシュンに剣で殴られた。海斗はギルドが頭に怪我をしてと思った。が、

「やっと故郷の関西弁がでたかあ。シュンお前忘れんなよ。なっ？それとこんなええ仲間に刀向けんなよお……。俺悲しいな。」

ギルドは不思議な武器でシュンの一撃を食い止めた。その武器はヨーヨーぐらいの大きさをワイヤーが伸びるようになっていた。簡単に言えばメジャーと同じような仕組みだ。だが、引つ張る持ち手の所に細い短刀のようなものがついていて。ギルドはその武器のワイヤーの部分でシュンの剣を受け止めた。

「全く。僕は初対面の人に自分の故郷の言葉を使いたくなかっただけだよ。っていうか本音を言えばお前と同じ方言を喋りたくないんだよ。3人とも悪かったね。さすがにいきなり関西弁じゃ引くとおもってさ。」

ギルドに一撃を食い止められたことにこめかみを引くつかせながらシュンが言った。

「俺とスピードはシュンに君らの話しきくから君らはもう寝え？色々あって疲れたやろ？」

そこに5つ6つ部屋空いてるから好きなどは行って寝な。じゃあおやすみ。あ、お風呂は部屋についてるから好きに入りい。そうそう。荷物出すの忘れなやあ」

ギルドはマシガンのようにバーっと言いたい事を言うときゃつと言う声とともにスピードとシュンと一緒に向こうの部屋に姿を消した。

「「「おやすみ。」」」

3人は色々あった一日を終えて、テントではなくK，Sに襲われる心配のない建物の中でぐっすりと眠った。

NO8 完

〈NO9〉 ギルド・スピード（前書き）

新キャラ、ギルド君&スピード君が登場して
どうなるんでしょうか!?

（NO9） ギルド・スペード

ジリリリリリッ！朝の3時スーラの裏側。ジャングルには似合わない真っ白な塔の中で目覚まし時計が鳴り響いた。

「あー・・・眠い。」

海斗はパジャマのまま眼をこしこすりながら廊下に出てきた。廊下にはリオンとシオンも出てきていたが二人はもう服を着替えていた。

「海斗起きるの遅っ！しかもまだパジャマかよー。」

リオンがあきれて言った。

「うるさいな！いくらなんでも3時に起こされるなんて思ってたし、次の日の服の用意なんてしてなかったんだよ！！」

海斗も反論した。そこへシオンがわって入った。

「リオン、海斗はこんな風に旅に出るのがたぶん初めてなんだよ。旅行と違って1日1日の服とか決まってないから。」

ね？と海斗のほうを向いてシオンが笑顔で言った。海斗は一応年上なのに子ども扱いかよ。とため息をついた。

「おっはあーみんなよー眠れたかあ？ギルドくんのとーじょーっ！」
陽気な声とともに現われたのはギルド。昨日会ったばかりだが人懐っこい性格ですこしペースを崩される人だ。

「朝にお前みたいなのと一緒にいるとかなり不快だ。」

ギルドに続いて現われたのはシュン、彼も昨日会ったばかり人だ。
K・Sに殺されそうだったところのリオン、シオン、杏奈、ライを助けてくれた命の恩人でこの塔に招き入れてくれた人でもある。

「おはようみんな。」

笑顔で次に現われた人に海斗はものすごく驚いた。なぜなら出てきた人は昨日の戦闘で負傷し寝込んでいたはずの杏奈だった。くちをパクパクしている海斗たちを見て、杏奈はくすくすとわらった。

「やあね。まるで幽霊を見たような顔しないでよ。ここの設備がすごく整ってて早く直ったのよ。すごいでしょ？もう全快よ。」

そして、きゃっほーとはしゃぐ杏奈、まるで子供のようなだ。シュンはもう少し杏奈のことを大人だと思っていたのだろう。そして海斗に「いつもあんなにかんじかい？」と耳打ちした。だが、海斗自信も驚いているのだ。杏奈とは短い付き合いだが大人びた感じで全然さっきの様なはしゃぎ方は見たことが無かった。

「あ・・・杏奈さんが直ってるって言うことはライも!？」

ふと呆然としていた海斗が我に返って俊たちに聞く。

「いや・・・ライ君の病状は異例でな・・・もうあかんかもしれへんねん・・・。」

ギルドが重々しく言った。あまり彼には合わない雰囲気だが。

「え・・・そんなうそだろ!!だって、」

海斗がそう言いかけた時「リーラホーツ!」と言う陽気な声とどび蹴りともにライが現われた。しかも素晴らしく海斗の頭にヒット。

「は・・・はあ!？ちよつとギルド!!ライはもうだめかもしれないんじゃないのかよ!？」

海斗が頭をさすり、ライを指差しながらキレ気味に言う。とギルドはケラケラと笑いながら答えた。

「えー?だってそっちの方がおもしろいやーん。なーライ君。」

「ですよねーあははー。海斗のマヌケ顔が見れて面白かったよー。」
「意気揚々と言うライとギルドにもう怒る気もうせた様子の海斗。その方をぽんとシュンが叩いた。」

「はいっではー。よわーい海斗君たちに戦闘を教えましょー。」
パンパンと手を叩きながらギルドが言った。ちなみにここは白い党の地下にあるだっ広い体育館のような所である。まるで小学校の授業のように海斗たちは三角座りをしている。(除くスピード・シュン。)

「さて特訓じゃ。まず、先生を教えるねえ?まず、ライ君と杏奈ち

ゃんは基礎を出来てるからー。先生はシュン先生だよ？みんな先生呼んでー。せーの、っ」

「真面目にやれ。バカが・・・。」

ふざけてまるで幼稚園の先生のように喋っていたギルドにシュンの鋭いけりがわき腹にヒット。

「シュン痛いー。何やねん！！蹴ることないやんか！！しかもお前また標準語で喋ってんちゃうぞハゲッ！」

わき腹を押さえながら吠えるギルドを軽く無視をして話を進めるシュン。

「バカはほつといて。まず、さっき説明したように杏奈とライは僕が指導する。次にリオンとシオンはスピードに見てもらおうよ。最後に一番弱い海斗はギルドが見る。いいね？」

ご丁寧が一番弱いと言うところを強調して言った。もちろんそんなことを言われて引き下がる海斗ではない。

「ちよつとシュン。どういうことだよ！！俺は確かに弱いかもしれないけどお前に俺の強さがいつ分かるんだよ！！ふざけんな！！」

もしシュンがリオンのような人だったならば海斗はもうこの世にいなかっただろう。だがあの白い塔に向かった時のようにシュンは海斗を華麗に無視した。そして何事も無かったように話を進める。

「じゃあ僕のチームは別の部屋だからついておいで。」

シュンがパチンと指を鳴らすと壁の一つから入ってきた時とは別の扉が現われた。シュンたち3人は新しく出てきた扉から部屋を出た。そして、シュンに無視されて呆然としていた海斗がふと我に振り返りシュンたちを追う。

「ちよつと待てよ！俺はまだ答えを聞いてな、痛っ！」

3人を追いかけた海斗のわき腹にスピードの鋭い蹴りが入った。まさかおとなしいスピードから蹴りが入ると思わなかったのだろう。海斗はわき腹をさすりながらまた呆然としている。そんな呆然としている海斗にスピードが冷たく言い放つ。

「こんな僕の軽い蹴りさえ受けられない。見た感じ、全体の雰囲気

からあなたの弱さなんて分かるんです。シュンさんに生意気な口を利かないでください。」

それだけ言うとうふいっと後ろを向いてリオンとシオンの方に歩いていった。

「あらー。スピード怒らすなんていい度胸してるなあ。海斗君。」さっきまでシュンに蹴られたせいで三角座りをしていじめていたはずのギルドがいつの間にか海斗の横にいてその肩にトンと手を置いた。未熟な海斗にはギルドが自分の方に来ていたことさえ分からない。

「まあ。俺が歩いてきた気配に気が付いたら海斗君も合格やな。」海斗もいかに自分が弱いかが良く分かったようで今度は誰にも怒鳴ったりせず、黙ってうなずいた。まあ相手がギルドだったのもあるのだろうが。

「よし、海斗君。俺と君の訓練はいたってシンプルやでえ。まースピードのチームと合同やねんけどなあ。最初のミッションというか課題は俺とスピードに自分の武器で一撃くらわせたからおしまい。最初は俺もスピードも弱気やから安心してなあ。」

スピードとギルドは大声で向こうにいるスピードに呼びかけた。するとスピードは海斗たちの方を少し振り返るとすぐに向こうを向いてしまった。

「あ・・・あれ？ギルド？？スピードさっき無視しなかった？？」

海斗が冷や汗をたらしながらきくとギルドはいつものことやからなあーと笑いながら答えた。

「じゃーはじめよか！！遠慮なく俺とスピードに切りかかってきてなあ。あ、でもちよっと待ってな。海斗君はビームソードやろ？そんなんで切りかかれたら危ないから一応これにして。」

そういつてギルドに手渡されたのは海斗のとさほど変わらないビームソードだった。

「え？何でこれに変えんの？？俺のでいいじゃん。」

海斗が首を傾げるとギルドからお前は俺を殺すきか！？と言う声と

ともに空手チョップが飛んできた。海斗の頭に直撃する。

「いってえ！！何もチョップすること無いじゃんか！！」

海斗が怒るとふいっとギルドは海斗から眼をそらした。しらじらしい演技だった。

まるでシユンのように海斗のこめかみがひくついた。シユンの気持ちに痛いほど分かる。

「んじゃー俺とスペードは武器持ってないからあー。リオン君たちも練習用の剣やからあ。海斗君もそれでええよねえ？」

海斗の方を振り返ってニコニコと笑顔になるギルド。

この人はどれだけ人をおちよくれば気が済むのか。

「んじゃあはじめ！！俺とスペードどちらに切りかかってもし！！」

その掛け声とともに海斗がギルドに切りかかったのは言うまでもない。

（NO9） 完

（NO） ギルド・スピード（後書き）

いかかでしたか？

良ければ感想お願いします！！

〈NO10〉襲撃

ギルドたちとの課題をはじめてから一ヶ月がたち、海斗はすさまじい速さで成長していき、ギルドたちをすぐに追い抜いた。……とそんなはずも無く今はリオンとシオンより少しだけ弱いぐらいまで成長した。付け加えておくがリオンとシオンも成長している。そこに追いついて来ているのだから昔のリオンとシオンはどうに倒せるようになってきているのだ。まあ、昔のリオンたちだったらの話だが。「だあ!!!!!!!!!!もうギルドの武器せこいよ!!!!」

いつもの練習部屋でリオンがギルドに切りかかりながら声を上げる。切りかかれたとうの本人はアハハアと笑いながら陽気に言い返す。

「ええーこれは俺の戦いのスタイルやしい、勝てる人は刀でも勝てるねんけどなあ。」

「うわあ!!!!!!!!!!すっげえむかつく!!!!!!!!!!」

ギルドを殴りたい衝動をなんとか押さえ作り笑顔まで作って大声で叫ぶリオン。そんな二人の横でシオンとスペードが無言の戦いを続けている。そんな四人を海斗は一人ボーッと眺めていた。サボっているわけではない。人の戦いを見て学ぶことも大切なのだ。

「ヒマだ……。」

コイツ本当にボーッとしてるだけで学んで無いじゃんとかつつこんでは駄目だ。海斗はこの一週間、誰とも戦わずただ四人の戦いを見ているだけで、4人の戦いをもう見慣れてしまっただけつまらないのである。最初の方はどちらかを応援したりしていたのだが戦う側からすれば声援というのはただ邪魔なだけだからと一度怒られたのだ。それから黙ってみていたそれも最初の方は面白かったが最近ではあまり面白くなくなってきた。

「ギルドー。俺も戦いたいーヒマー」

海斗が抗議の声を上げるとギルドは明日なあ。と余裕の声で答えた。

リオンの攻撃などへでもないようだ。それとも大丈夫なようなフリをしているだけのか。

「そんなに暇なんやったら地上に電話してきたら？？はいこれ。」
そういつてギルドはリオンの剣をよけつつ海斗に向けて携帯電話を投げた。海斗はそれをうまく手で受け取った。

「え・・・。これ地上に繋がるのか！？」

海斗が眼を見張ってじろじろと携帯を観察しているとギルドは得意そうに行った。

「もちろん。ふつーに地上と同じようにかけたら繋がるからな。てか、さっさと出てけ海斗君うるさいねん。」

しっしと指を上下に振りながら海斗を部屋から出そうとするギルドにむかつきながらもおとなしく練習部屋を出た。

「えっと・・・直樹の携帯わっと。」

慣れた手つきで親友・直樹の携帯に電話をかける。電話はあっさり繋がった。

「もしもし？黒鳥ですけど、どちら様ですか？？」

親友に似合わない敬語に噴出しそうになりながらも海斗は電話の向こうに呼びかけた。

「もしもし？俺だよ。海斗だよ？直樹？？」

海斗が自分のことを名乗ると直樹の口調はさっきと打って変わった。

「ああ！！海斗！？お前何所行ってんのさ？？ガッコに休学届けまでだしてよお！！俺心配してたんだぞ！！」

懐かしい親友の言葉に顔をほころばせながらもごめんごめんと声をかける。

「わりいな直樹。ちよつと気分転換の旅行のようなんだよ。そっちはどうだ？」

海斗がきくと直樹は待ってましたとばかりに話し始めた。

「あのさ、俺この中学三年ながらも就職先が決まったんだよ！！俺の実績を高く評価していただいてさあ！！すげえだろ！？」

この星スーラでは特別な能力を持っていない子供でもその実績など

をみて就職できることがあるのだ。だがその数も少ない。まさか自分の悪友達の直樹が就職するなんて思っても見なかった海斗はつい大声を出した。

「マジかよッ！ すごいな直樹！！ まさかお前が就職できるなんて思ってたなかったぜ！ で？ 何所に就職したんだ？」

海斗がそうきくといつもは良く喋る直樹が少し黙った。珍しいことなので海斗はどうしたのかと聞いた。するといつもと変わらないお気楽な声が返ってきた。

「海斗！ お前声でええよ！ 耳いてえじゃんかよ！！ まったく・・・電話で喋ってんだから声の調節ぐらいしろよ。」

あまり電話を使わない海斗は電話での声の調整などあまりしなかったのだろう。ごめんごめんと直樹に声をかけてあらためて聞いた。

「で？ 何所に就職したんだよ。」

なんというかわくわくしながら直樹の返事を待つと彼らしい答えが返ってきた。

「クッククク。それはお前が帰ってきたら教えてやるよ。教えて欲しいりゃさっさと帰って来いよ海斗。」

自分が今どうしているか知らない直樹の言葉だが、海斗はその言葉が嬉しかった。うるせえよいつものように返事しようとした。その時だった。

ガッシャーンッ！

派手にどこかが壊れる音がした。

「おいっ海斗！？ 何があったんだよ！！ 大丈夫か！？」

電話の向こうで大声を張り上げる直樹に海斗はすばやく答えた。

「ちよっとゴメン。直樹またいつか電話するわ。じゃなっ」

相手が反論する隙も与えず海斗は電話を切って音がしたであろう現場にむかった。

両親の形見、ビームソードとリングシールドを持って。

「くそっ。あ、海斗いい所に来た！！ って言うかもっと早く来いよ

この愚図ッ！！ぼーっと突っ立ってないで早く雑魚を片付けるのを手伝え！！」

海斗に気が付いてそう叫んだのはシュン。いつもと口調がちがい、少し言葉遣いが悪くなっていた。まあ無理も無いだろうさっきあけられた穴からK，Sがものすごい量なだれ込んできて、斬っても斬ってもきりが無いのだ。

「ツクソ。シュンッ！ここはもう無理や！向こうも穴開けられた！！全員まとめてる筈の緊急袋持ってもうここは諦めよッ！なっ？キリ無いわこれじゃっ！」

それから少しして声を上げたのはギルド。何処にも怪我はしていないが息が切れている。それもそのはず海斗やリオンたちのフォローにまで回らなければいけないのだから。

「・・・仕方がない。全員一度散れっ！！！自分の部屋から緊急袋をもって食堂にもう一度集まれ！！」

ギルドと同じく息が切れ気味のシュンが声を張り上げた。

「「「「「了解！！」「」「」「」」

全員がばっとその場から離れた。

「全員そろったね！？」

一番早く食堂に来ていたのはもちろんシュン。そして最後に来たのがギルドだった。シュンが全員いるか確認して、食堂の端をカパンと開けた。そこにはマンションなどによくある暗証番号を入れる機械があった。すばやく番号を入力すると今度は壁が一つ丸々開いた。向こうには最初海斗たちを迎えに来たものによく似た乗り物があった。けれど大きさはトラック一台ほどの大きさで屋根がついていた。「シュンさん。十メートルほど後ろから来てます。」

くいつとスピードがシュンの服の袖を引っ張った。そして僕が片付けてきます。と一言言うとその場を走り去った。

「ちよっとシュン。スピード一人で大丈夫なのかよ？俺が特訓の時見たところあいつ素手でしか戦ってなかったしさっきの戦いでは短

刀だけだったぞ？」

海斗はスピードが走り去った方向を眺めながら言った。襲ってきたK・Sの量から考えると心配するのは普通だろう。リオンとシオンも同じ意見のようでシュンをじっと見つめる。

その視線に気まづくなったのか、シュンは三人から眼を逸らした。

「大丈夫に決まってるでしょ。スピードは強いよ。あの子はあんまり自分の武器で戦おうとしないんだよ。なぜだかは知らないけどね。でも、たぶん今は自分の武器で戦ってると思うよ。あまり時間がないから。」

シュンはそこで一度言葉をきり、ほら来たよ。と言った。するとスピードがテクテクといかにも子供らしい歩き方で戻ってきた。シュンたちの姿を確認すると小走りで駆け寄ってくる。だが、彼の容姿は何所からどう見ても子供の格好ではなかった。まあ、短刀などを持つて戦っている時点でもう普通の子供ではないのだが。スピードは自分の背より巨大なハンマーを軽々と持って戻ってきたのである。しかもその服には返り血が少し飛んでいて少し汚れていた。

「あゝもう。スピードってばお前服汚しすぎやで。もうっその服を誰が洗うと思ってんねん。」

「少なくともギルドさんではないでしょう。」

ギルドの言葉にクールに返すスピード。可愛い顔にあまり似合わないことを言う。

「ほらスピード。ギルドなんか相手にしてたら駄目だよ。君たちはなにマヌケな顔してるのさ、置いて行くよ。」

ばんっと海斗たちを乗り物に蹴り入れるとシュンは全員が入ったのを確認して白い塔を脱出した。

（NO10） 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7068f/>

スーラ

2010年12月2日12時00分発行